
タイ国立公文書館を訪ねて

畑中 佳子

1990年9月初旬、私は夏期休暇を利用してタイを訪れた。旅行は6泊7日の行程で予定の自由な旅行であったので、折角の機会と思い、タイの公文書館を訪ねることにした。

全く個人的な私の見学を快く承諾して下さいしたのは、Archives Sub-DivisionのHeadであるカニタ=ワンパニットさん。女性である。日本で言えば、課長クラスであろうか。御自分の部屋と秘書1人を持っておられた。ここタイの公文書館では、殆ど男性を見かけ

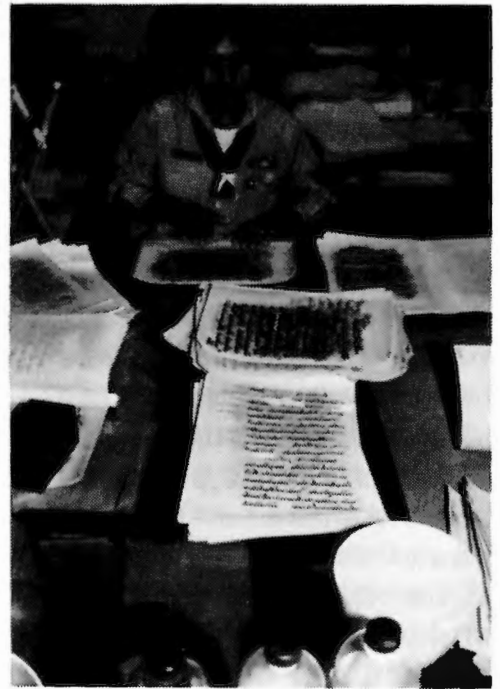
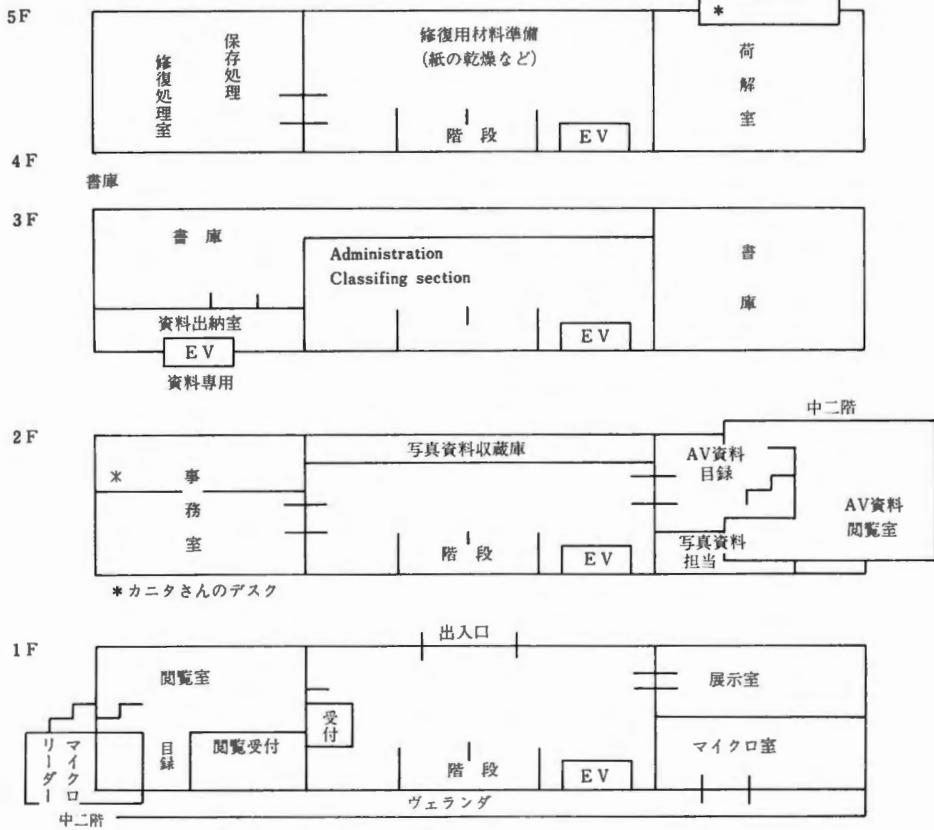
なかった。我が東京都公文書館では19人の職員のうち女性はわずか3名である。一応女性である私は、世界にはたくさんの仲間がいるのを見てうれしくなった。

■文書館の位置

タイ国立公文書館は首都バンコク市の中心部にある。バンコク市内にはチャオプラヤ河が蛇行しながら南北に流れている。河の西側が有名な暁の寺のあるトンブリ地区で、文書館は反対側の東河畔、王家専用の船着場のす

■館内配置図

* Semi-Current資料が現局の要請によって保管されている。



ぐそばに位置している。文書館の隣には国立図書館があり、市民にはこちらの方がよく知られているので、道を聞く時は国立図書館の場所を聞いた方が早い。というのは、タイ国立公文書館はもともと1952年、文部省学芸局所属の公文書部として国立図書館内に設置されたのが始まりで、現在の建物が建てられて公文書館となったのは1976年のことだからだ。

国立の公文書館にはこの他、地方分館としてチェンマイ（東北部の地区の公文書を集める）とナコーン・シッタマラー（南部地区同）の2館がある。更にティンシュラノング將軍に関わる資料の寄贈を受けて、ナコーン・シッタマラーにも当該資料のみを集めた分館がある。

■活動

受け入れている資料の範囲だが、古い文化的な古記録類は、隣接の国立図書館で収集保存するので、公文書館では主に近代以降の政府公文書（軍も含む全省庁を対象とする）及び寄贈を受けた私文書類を保存管理する。その資料の形態は、記録・写真・AV等、その形態を問わずに受け入れている。このため記録・文字資料の閲覧室とは別にAV資料閲覧室が設けられている他（館内配置図参照）、写真などは取扱いに注意を要するので保存庫が別にしつらえられている。写真類は、チーク材のケースに納められて収蔵されており、かなり神経の行届いた取扱いが為されている。また言うまでもないが全館冷房による温湿度調節が行われている。

検索手段については、通常冊子目録に依っているが、SARBICA（ICA東南アジア部会）のCountry Reportによれば、ダムロン・ラジャヌパー王子の教育改革（1887～92年）に関する資料及び王宮で行われたAV Archives Collectionについてはコンピューターによるレファレンスを研究中だということである。

この他、カニタさんが担当している業務に、現局に対する公文書管理やシステムに関する指導や助言がある。助言内容を強制することはできないが、現局に対して廃棄を停止させ

る権限を持っている。なかなか力のあるところである。

文書の公開は原則として完結後20年であるが、20年に満たなくても現局の合意があればどんどん公開しているという。

現局からやってくる文書は、ファイリングシステムをとっているため、写真（左）のような形で公文書館に届く。いずこも同じ風景だと妙なところで感心した。ただ、日本のように原議毎に保存年限が決まっているのではなく、一件毎のファイルには大変細かいメモまですべて一括して保存される。頂度私が訪問した際、大阪外語大学の教授がいらして、私とカニタさんの間で通訳をして下さったのだが、その方が閲覧していらしたのは、日本軍がビルマを占領していた際、タイ国軍が行った諜報活動の記録だった。実に細かいメモ類までよく保存されており、貴重なものである。こうした古い記録に限らず、新しいものであっても実に丁寧に保存されていた。

文書の受入れから利用提供までの流れを簡単に述べておこう。

文書はまず5Fの荷解室に入る。一部半現用の公文書の書庫にもなっているが、受入文書はまずここに入り、そして燻蒸される。このうち保存修復の必要なものは手当てをし、3F・4Fの書庫に収蔵され、請求があれば1Fの閲覧室で利用に供される。言わば建物の上から下へ資料・文書が流れるような形になっていた。

2時間程の見学は、館内を一巡して若干御話を伺うだけであつという間に費されてしまった。わずかな時間であつたが、この訪問で私が驚いたのは、日本よりもずっと文書館学の原則に基づいて公文書館が活動・機能しているということであつた。我々は、何かにつけて西欧に範を求め、それに習おうとしがちであるが、日本と同様第二次大戦後に歩み始め、高温多湿の環境下で資料を守り、伝えてきた東南アジア地域の仲間達に学ぶことも多いのではないかと思った。

紙幅の関係上、あまり多くを紹介できな

かったが、タイ国立公文書館でいただいた簡単な公文書館の歴史と利用の仕方を書いたも

のが手元にあるので、御希望の方には御頒けしたい。 はたなか けいこ・東京都公文書館